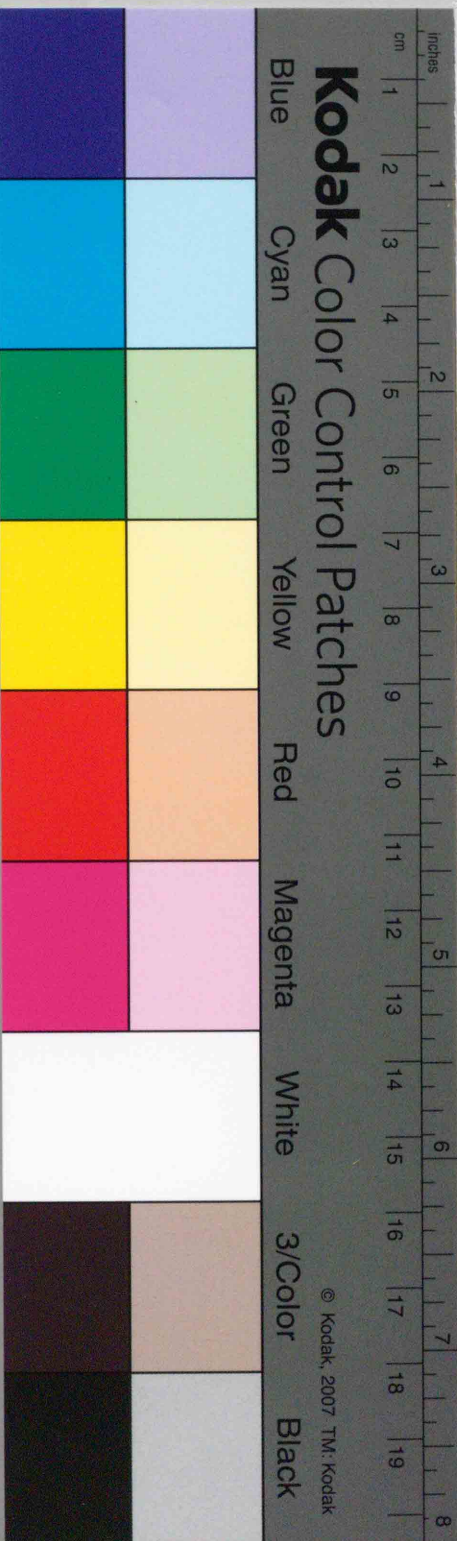
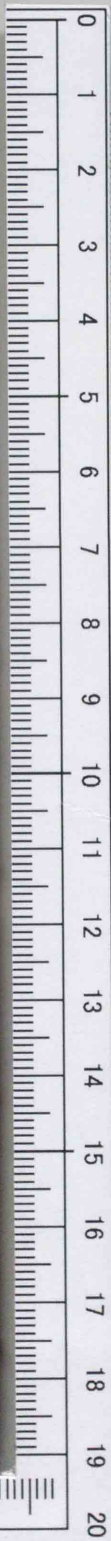


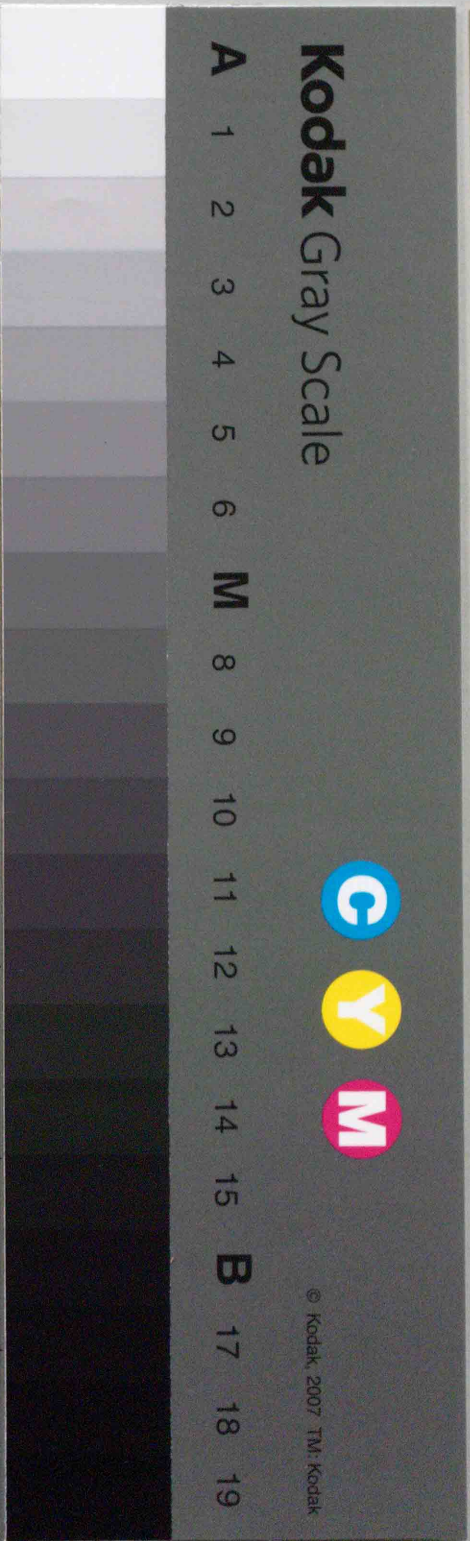
375.9
Y213
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

30522

教科書文庫

3
290
32-1893
~~2000~~
53208

200030
2915



資料室
中央図書館

375.9

Y213



編纂の要旨

一本書ハ、文部省定むる所の小學校教則大綱ニ依り、高等小學校に於て、日本地理、外國地理を教授するの用に供せんが爲めに、編纂する所なり、

一本書の記事ハ、教則大綱定むる所の教科目及其順序と一致するハ勿論、其資料ハ、人民の生活に關する重要なる事項を理會せしめ、愛國の精神を養ふに足るべきものを採ることを務めたり、
一小學校の教科に於てハ、事實の錯雜と繁多とを避け、専ら簡易明晰を旨とせざるべからず、即本書ハ、其選錄上に特に心を用ひ、地理科の目的上極めて重要なるもの、外ハ、多くハこれを省略せり、然れどもまた記事の全體ハ、乾燥無味に失せざらんことを務めたり、

一地圖ハ、地理を學ぶに最も要用のものなれば、其編製に深く心を



用ひたり、日本地圖ハ、近來の地誌ハ多く各道分けのものを
 用ふれども、此編製法に依るときハ、各道の地形上相互の關係を授
 くるに不便なる所多きを以て、予ハ別に適當なりと信ずる日本
 東部、西部及北部の三區畫を設けて、これを編製せり、而して右の
 地圖ハ、實測地圖、其他現今に在りて最も精確と稱せらる、陸軍
 省、農商務省、内務省の編製に係る諸地圖等に據りて、畫きたるも
 のなれば、其全體に於て誤なきことを信ず、然れども本書の地圖
 ハ配法小なるを以て、小なる山川等を省略せるハ勿論、山系等も
 固より委曲を悉すこと能はざるものありしなり、
 一地圖中山地と原野とを色分けせるハ、地面の大勢を理會せしむ
 るの便を計りたるものよしして、原野の部もまた小山を包容し、
 山地の部も小原野を包容するものなきよあらず、是配法小な
 る地圖よ於てハ勢止むを得ざる所なりとす、

一産物の、現今よ在りて最も精確と稱せらる、數種の統計書類を
 參照して、其産額の巨大なるもの、其將來に望多きものを採録せ
 り、而して我國の産物を記するよ當り、州名の彼此次第不同なる
 ハ、主として其産額の多寡に基つき、これを前後したるによるな
 り、
 一外國地名の稱呼ハ、主として英語に據りたれども、我國と最も關
 係多き支那、朝鮮、佛蘭西、以太利、獨乙、埃地利、魯西亞の地名ハ、特に
 其國人の稱呼に従ふこと、せり、然れども既に我國人の慣用す
 る所のもの、如きハ、必しもこれを改めず、
 一外國地名ハ、普通慣用するもの、外ハ假名を用ひて記載せり、而
 して其呼法につきてハ、つ、や、ば等の如く假名の傍に標を附した
 るものあり、即つハ、まづたし(全)のづの如く、やハ、む志や(武者)のや
 の如く、ばハ、ぼれの如く、呼はしむるを法とせり、

一日本地理の總論に於てハ、簡明に要領を記述するに止め、徒に多く山川の名稱等を列記することを避けたり、是限ある紙上に總合的の記事を多端に排列するハ、徒に兒童を苦しむるのみよて、明にこれを理會せしめ難きことを慮りてなり、

一日本地理復説の部ハ、全編の關鍵として、既に授けたる事項を概括融和して、これを各人の生活上に應用するの資を得しめんとするに在れば、民業上の有様及其經濟上の關係を詳説せり、

一日本地理復説の部は於て、多く外國との關係、殊に其貿易上の關係を説くハ、或ハ高尚に過ぐるかを疑ふものなきにあらざれども、是蓋し小學校に於て外國地理を授くるの目的を熟知せざるに坐す、これを要するに外國地理を授くるハ、事事これを日本に歸結して、我國の情況を明解せしむるの資となし、又我國に缺くる所を判別し、彼の長を採りて我短を補ふことを知らしめ、世界

の競争場に於て、我國をして優等の地位を得しめんとするに外ならず、然らざるときハ、外國地理を授くるの必要殆ど消滅せんのみ、

一日本地理復説の部ハ、記事平易ならんことを務められども、經濟上等に關してハ、尙多少理想上に涉る事柄を加ふるの止むべからざるものありて、これを明に理會せしめんハ、特に教員の委曲なる説明を要すべく、他編と同じ割合を以て修了し難きことを慮り、故らに其紙數を減じ、分量を軽くせり、

一日本地理復説の部の米麥、生絲及織物産額比較圖は、主として明治二十三年刊行の農商務省の第四次農商務統計表に據りて編製し、輸出入品表ハ、主として内閣統計局編纂の日本帝國第十統計年鑑に據りて編製せり、又軍備比較表ハ、陸軍省の福家安定君、海軍省の肝付兼行君、馬場新八君の幫助に依り、斬新の事實を蒐

集することを得たり、茲に謹みて諸君の厚誼を謝す、
一 近來地誌に、其授けたる事柄に關して問題を附記するものあ
れども、元來設問に、兒童の練習の淺深に關し、或ハ全體に付き、或
ハ部分に付きてこれを發し、或ハ演繹的に、或ハ歸納的にこれを
發すべきものにして、豫め一定の題目を設くるが如きハ、器械的
教授に陷るの弊を生じ易けれハ、本書に於てハこれを掲載せざ
ることとせり、

一 本書緒言の部ハ、郷土地理の教科書との關係連絡を考へ、或ハ郷
土地理に先ちてこれを授け、或ハ郷土地理を終るの後これを節
略して授け、又は全くこれを省く等、一に課程上の便宜によるべ
し、

一 本書ハ、予が先に尋常小學科の爲めに著作せし日本地理との間
に、自然の關係連絡あり、尋常及高等小學科に於てこれを併せ用

ふるるときハ、互に照應啓發するの効多くして、重複の嫌あるを見
ざるべし、併しながら本書ハ、又尋常小學科にて地理を學ばざる
兒童に直ちにこれを課するも、固より毫も缺くる所あることな
く、又教授上艱澁を覺ゆる所なかるべし、これ予が特に心を用ひ
たる所なり、

新地誌卷一

山田行元編

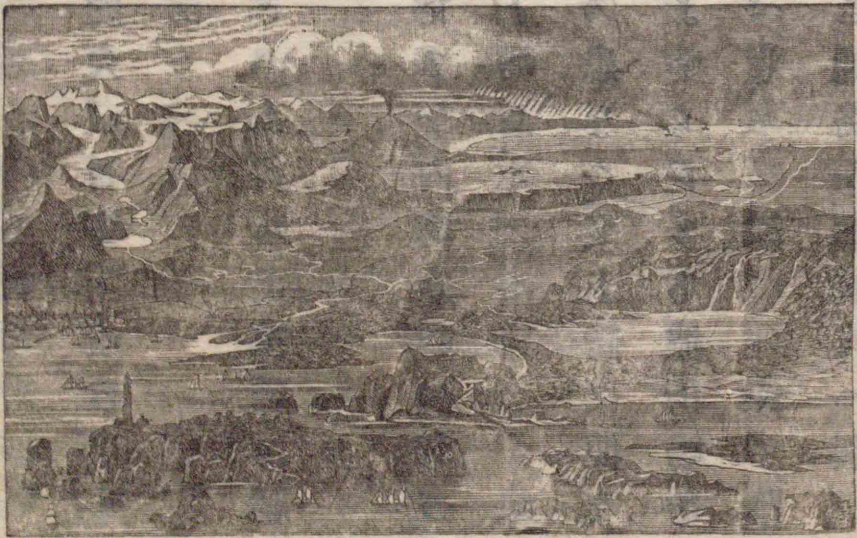
緒言

我等の住居する地の外面に、陸あり、水あり、草木生
 じ、鳥獸、虫魚栖み、山に鑛物を藏し、我等はこれにより
 て生活す、此等のありさまは、地理を學びて、これを知
 ることを得べし、
 地理を學ぶに、豫め、たは、たの地形を、知らんこと
 を要す、

地の外面の窪き所に、水の湛へたるを、海といふ、海水

の、總て去ほおらし、
 地の高くして、水に浸されざる所と、陸といふ、
 陸の四方、水に圍まれたる島といひ、島の多く集ま
 りたるを、群島といふ、
 陸のまはり、水に圍まれた水に圍まれ、一方あづかれ他
 の大なる陸に連なるを、半島といふ、
 陸の海に突き出たる端を、岬といふ、岬の又崎といひ、
 鼻といふことあり、
 二つの大なる陸を連ぬる、狭き地を、地頸といふ、
 陸の水につづく所を、岸といひ、水に近き所を、濱とい
 ふ、

陸のなほ、かた平にして、低
 きを、原野といひ、其高きを、
 高原、又の臺地といふ、
 原野、又の高原等の間にあ
 りて、や、高きを、丘といひ、
 丘より高きを、山といひ、山
 の續きたるを、嶺、又の山脈
 といふ、
 山の原野、つづく所を、麓
 といひ、斜に登る所を、山腹
 といひ、登りつめたる所を、



峯といふ、
山峯、又ハ山腹に孔ありて、煙火、灰石等を噴き出すものあり、これを火山といふ。
山に圍まれたる低地を、谷といふ、谷ハ土地殊に肥れたる所多し、
海の、深く陸地に入りこみたるを、内海といひ、わづかに陸に曲り入りたるを、灣といふ、
自然の地形よくして、風波の患なく、又上陸に便なる所を、港といふ、又港ハ、地形よからざるも、波止場を築きて、これを造ることを得べし、
二つの海を連ぬる、水の狭き通路を、海峡、又ハ瀬戸といふ、

いふ、
陸の間に湛へたる水にして、海水の通ぬ所を、湖といふ、湖の水の、流れて海に注がざるものハ、海の如く、
とほからきことあり、
雨水の、地中に入りて流る、細き水脈、相合して泉となり、泉集まりて、河となる、河の小さきものハ、川と稱することあり、
河の、湖又ハ海に注ぐ所を、河口といふ、又小さき河の大なる河に注ぐものを、支流といふ、
河水の、急に崖より落つるハ、これを瀧といふ、
凡ろ水の流れ早きを、瀨、又ハ灘といひ、巖石のわづかに

に水にわくる、と暗礁といふ、船人の畏る、所なり、
陸及水に、種種の産物あり、原野より、穀物、家畜等
を産し、山より、木材、礦物等を産し、水より、魚類等
を産す、

人民ハ、皆地の利をみて、其住居を定む、即農業者ハ、原
野、谷等の、土地肥にたる所を選びて、村を建て、田圃を
開き、工業者ハ、其工藝に用ふべき材料の豊かなる所、
工藝品を賣るに便なる所を選びて、工場を設け、商業
者ハ、大なる農業地方、又ハ工業地方をひかへ、又ハ港、
河、湖等とひかへて、物を賣買するに便なる所を選び
て、商店を設くるなり、

商業者、工業者の多く集まり住む所を、町といひ、其人
口殊に多くして盛なる所を、市といふ、市及町の盛な
るものハ、これを都會と稱することあり、
此等の陸と、海とのありさまハ、前の畫に就きて、其れ
ほかたを知ることを得べし、又我等の住居する郷里
の、地形上に就きて、親しくこれを觀ることを得るも
のあらん、

前の畫ハ、我等が、家、又ハ山等を、側面より見るが如く
畫きたるものにて、其背面の物と、見ること能はず、且
遠き所にあるものハ、近きものよりも小さく見えて、
物のまことの位置、大さを知り難し、故に地理を學ぶ

爲めに、別に地圖といふものをつくりて、地の外面のありさまを示すなり、地圖の地の外面の物を、總て其上より見ねるすが如く、畫くものにて、家、又は山等の四邊、見ねざる所なく、且其まことの位置、大きさを、明に知ることと得べし、然れども、地圖に於ては、また地上に立ちたる家、木等の全形を、示すこと能はざれば、此等の物の、常に符號を設けて、これを畫くなり、

又地圖の物の大きさと同じ割合に、畫き難きを以て、數十萬分の一、又ハ數百萬分の一等に縮めて、これを畫くと常とす、而しておやうに縮めたる地圖にハ、小さき島、山、河、町、村等ハ、これを省き、大なる市、町の如きも、唯圈の中に黒き點を、しるしたる符號を以て、これを示すなり、

地理を學びて、地の外面の物の位置、大きさを、たしかに知らんとするにハ、方位、距離を知ることと要す、方位ハ、日又ハ星を見て、これを知るべし、我等ハ、日中、即日の天の最も高き所に至りたるとき、日に背きて立てバ、右ハ東、左ハ西、後ハ南、前ハ北なり、東、西、南、北の間の方位ハ、各二方の名をつられて、これを呼び、東北、東南、西南、西北といふ、又方位を見るに用ふる器に、磁針盤といふものあり、其針の頭、常に北の方を指すも

のなり、
地圖上の方位ハ、常に上を北とし、下を南とし、右を東とし、左を西とす、然れども地圖を見て、北なる地方を上といひ、南なる地方を下といふハ、當らず、地圖上に於て、上の語ハ、唯山、水源等に、これを用ひ、下の語ハ、低地、河口、海等に、これを用ふることを得べきのみ、距離をはかるにハ、尺と基とす、而して六尺と一間といひ、六十間を一町といひ、三十六町を一里といふ、又地面の廣さにつきてハ、一里四方と、一方里と稱することあり、

日本地理

第一章、總論

大日本ハ、中土、四國、九州、蝦夷、千島、琉球等のあまたの島島と合せたる帝國にして、地面の廣さ二萬四千八百方里あり、我國の東南にハ、廣き海あり、これを太平洋といふ、北にハ、日本海、れとつく海あり、西にハ、支那海あり、此四つの海ハ、水相通じて、我國を繞れり、我國の地形ハ、狭くして長く、蝦夷の東北の端より、九州の西南の端まで、長さ五百里にあまる、又これに千

島、琉球を加ふるとき、長さ千里にあまる、幅は、中土の最も廣き所にて、六十里ばかりなり、我國の四方に海繞り、海岸も出入多くして、よき内海、又ハ灣をなせるを以て、領海甚廣く、舟運の便、捕魚、採藻の利多く、且風景畫くが如き所多し、中土、四國、九州、蝦夷の内部にハ、各高き山嶺あり、其支嶺又處處に連なりて、全國山多し、殊に中土ハ、其土地最も大なれば、山嶺もまた最も高きものあり、此山嶺のまはりには、土地肥れたる原野少をわらず、山間にも、土地殊に肥れたる谷ありて、億萬の人民の住居に適せり、

況や内地に多き山、山ハ、無數の清川を出し、其水ハ、田野に注ぐべくして、不毛の地なく、又其水力ハ、これを工業に利用するの便多く、且山水の風景美しくして、人民の最も幸福なる住所たり、然れども我國にハ、唯一つの恐るべき事あり、火山及地震多きこと是なり、火山破裂して、灰石等を降り、大地震動して、家屋等を倒したること、其例徃徃これあり、尤我國にハ、火山多き代りに、處處に温泉湧き出で、愉快なる浴場を開きたるものあるなり、我國の南部ハ、氣候暖か、北部ハ寒けれども、中間の最も廣大なる地方ハ、寒暖中和を得たり、而して全國

いづれの處も、有用なる植物、動物の繁殖せざるはな
く、又よく人の健康に適せり、海峽の東にありて中國の
我國の地形、氣候二つをがらよく、人民のよく農業を
勤め、又天性技藝に巧なるを以て、産物豊かにして、我
等の生活に必要なもの、これあらざるはなし、我
等の、將來益々これが改良進歩を計り、國の富を致さ
んととと勉めざるべからず、海峽の東にありて中國の
産物の名あるものを擧ぐれば、鑛物の、銅、石炭最も多
し、農産物の、米穀最も夥しく、生絲、茶、麻、煙草に富む、又
山林より、多く木材を出し、海より、多く魚鹽を得るな
り、工藝品の最も精巧なるは、陶器、漆器、銅器、絹、木綿、麻

の諸織物、紙等にして、其産額もまた多し、

我國の人口は、凡そ四千餘萬あり、これを全國の面積
に配當すれば、一方里毎に、千六百餘人づつ住居する
割合なり、然れども、實際各地方の人口の疎密は、一を
らずして、南部は、居民甚多けれども、北部に至れば、其
割合次第に減じ、蝦夷に至れば、非常に僅少なるを見
るなり、
人民のれもなる生業につきて、これを別つとき、農
業に従事するもの最も多く、商業これに次ぎ、工業又
これに次ぐ、
我國に、人口二萬以上の都會をなせるもの、五十餘

新地誌卷一
箇所あり、其内殊に盛にして、市と稱するもの、三十九に及ぶ、東京の天皇のあます所にして、我國の首府なり、

我國の地理上に於て、畿内、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道、北海道の九部に分つと常とす、而して畿内及八道は、又小さく分ちて、州となす、今州の數、凡そ八十五あり、我國の地理の、一層詳なること、畿内及八道の區別によりて、更にこれを述べん、

第二章 畿内

第一、位置及地勢

畿内は、中土の中部の地方にして、山城、大和、河内、和泉、攝津の五州に分つ、山城は、畿内の北部にあり、其南を大和とす、大和の西に河内あり、又其西に和泉にして、攝津は山城、河内の西に連なる、攝津、和泉の二州は、淡路島と相對して、内海をいだく、これを茅渚の海といふ、地勢は、東の方東海道の界に、山嶺あり、是北陸、東山の二道を横ぎり來る大嶺にして、大和の東南に、大臺原山、大峯等の大なる山あり、西北の方、山陰、山陽の界に

も、數多の山嶺あり、山城の比叡山、愛宕山、名高き山なり、

此等の山嶺の間、平野廣し、これを畿内の平野と稱す、淀川、大和川流れて、地味肥なり、中にも淀川、琵琶の湖の下流なる宇治川、其他の數川と合せたる大川にして、運送の便多し、又吉野川、大和の南部の山間を流れて、紀伊に下る、

第二、氣候及產物、

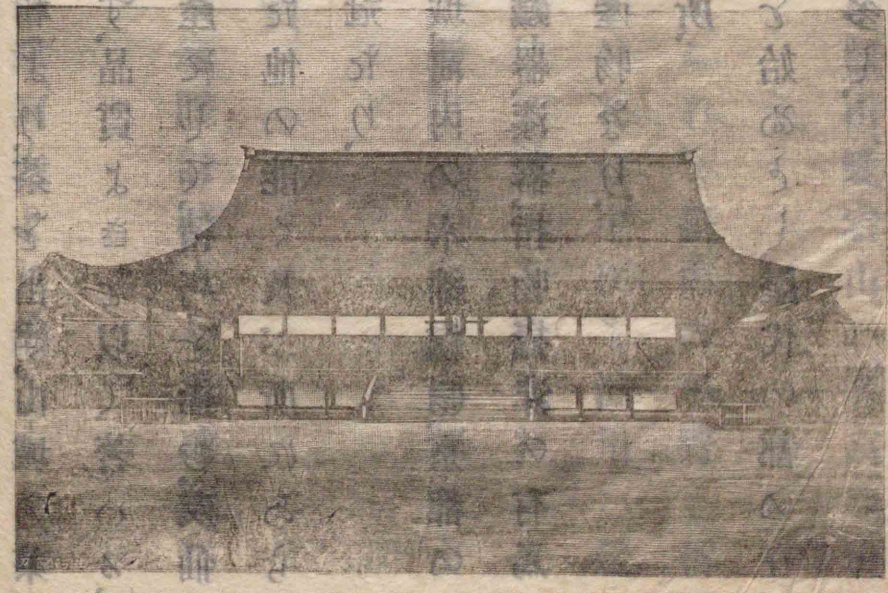
氣候ハ、温和にして、極寒にも、寒暖計時として氷點に下ることあるに過ぎず、

產物ハ、河内より、米を出し、攝津、河内より、綿を出し、和泉より、砂糖を出し、山城、大和より、茶を出す、山城の茶ハ、唯其量の多きのみならず、品質よきを以て著ハル、京都の絹織物ハ、古來の名産にして、精巧を極む、友仙染、鹿子絞の美しきこと、また他の能く及ぶ所にあらず、攝津の酒ハ、品位全國に冠たり、大阪の木綿絲、和泉、大和、山城、河内の木綿織物、京都の陶器、扇子、京都、大阪の銅器、鐵器、漆器、指物、攝津の有馬の竹細工物も、皆れもなる產物なり、

第三、都會及名所、

畿内ハ、神武天皇の橿原を始めとし、歴代の都の在りし所なれば、都會及名所多し、

山城に於て淀川の支流を流るる賀茂川に沿ひて、京都府の故都といふ大都會あり、千餘年前よりこの地に於て、久しく我國文化の中心たりしを以て、人口多く、市街賑わひ、種種の優美なる王藝品を出す、賀茂川の東に、一帯の丘ありて、東山と稱し、壯なる寺院、面白き林泉多し、西



山にも、櫻の名所なる嵐山、紅葉の名所なる高雄等あり、大和の北部に奈良といふ町あり、是もまた昔の都にして、今に都會となす、東大寺に、名高き大佛あり、春日の社も、此地の名所なり、奈良の南六里に、畝傍山陵あり、是神武天皇の御陵なり、吉野川の南なる吉野山に、櫻花に名あり、又南朝三代の皇居なるに、よりて、古跡多し、大和に、此外にも名所多きを以て、諸國の人來り遊ぶもの多し、河内の金剛山に、南朝の時、楠正成の北條氏八十萬の軍を破りし所なるを以て名あり、

和泉の堺ハ、和泉と攝津の界にある、繁盛の市なり、此地より、多く段通と稱する敷物、及刀物を出す、

攝津の大阪ハ、淀川の川口にある大都會にして、海運の便多く、鐵道四方に連なり、我國通商の中心を占め、又外國貿易場の一にして、商業甚盛なり、此地、又種種の工藝品あり、大阪城ハ、昔豊臣秀吉の築きたる、有名な城なり、

大阪の西八里ばかりに、神戸港あり、外國貿易場の一にして、市街ハ兵庫に連なり、繁盛の都會たり、今これと併せて、神戸市と稱す、

兵庫、神戸の間なる湊川ハ、楠正成の戦死せし所にし、今湊川神社あり、又神戸の北三里ばかりに、有馬の温泉あり、

攝津の西境の海邊に、須磨の浦あり、風景のよきと以て著る、此處に、源平の古戰場なる一谷等あり、

第三章、東海道、

第一、位置及地勢、

東海道ハ、畿内の東にありて、海を帶ぶる地方にして、十五州に分つ、其西の隅なるを伊賀とし、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、其東に連なり、長さ大略百五十里に及ぶ、此十五州の中、伊賀と甲斐とを除き、他の十三州ハ、皆海に沿へり、伊勢と尾張ハ、伊勢の内海をいだし、志摩ハ、山嘴をなして、伊勢の東南の方より、外洋に出づ、山嘴とハ、山地の海に突き出てたる所をいふなり、尾張と三河の間ハ、三河灣あり、遠江ハ、遠州灘と稱

する大海に向ひ、駿河ハ、南海に突き出てたる、伊豆半島と相對して、駿河灣をいなく、相模の南ハ、相模灘あり、相模の三浦山嘴ハ、房總半島と相對して、武藏の内海をいなく、半島の極端と、野島崎といふ、地勢ハ、伊賀の一州ハ、四方山圍みて、谷間あづかに平地あるのみなり、殊に此州ハ、東に大嶺を負ひたるにより、其川ハ、皆西に流れて、畿内に入り、地勢ハ、東海道と隔絶せり、伊勢ハ、海濱平野廣けれども、内部ハ、東山道なる美濃より續きたる大嶺あり、志摩ハ、其支嶺の海中に突

き出てたる所にして、何處も山ならざるはなく、海岸も、斷崖險しくして、海上に島多し、

尾張ハ、地勢大に開けて、廣野美濃にわたり、木曾川此間と流る、其流大にして、運送の便あり、

三河、遠江ハ、内部に、東山道より續きたる駒岳の山脈と、東山脈と稱する大嶺ありて、山多けれども、其間を

流る、矢作川、天龍川等の沿岸より、海邊にわたりて、平野多し、

伊勢、尾張及美濃、三河、遠江の平野ハ、地勢相連なりて、一大平野と成す、これを關西の平野と稱す、

駿河の西部に、東山脈の支嶺ありて、大井川等其間を流る、

駿河の東部にハ、名高き富士山あり、高さ一萬二千尺餘にして、數十里を隔てたる所より、よく見ゆ、夏も殘雪あり、即地面高ければ、寒氣隨ひて烈しきことを知るべし、富士山の麓ハ、廣き草野、海濱に連なり、富士川其西を流る、

甲斐ハ、富士川の上流にある、大なる谷にして、四方に山繞り、八岳、白根等の高き峯あり、

駿河、甲斐と、相模との間にハ、東山脈よりわかれたる嶺ありて、相模にて大山、箱根山となり、遠く伊豆半島にわたりて、天城山となる、其極端を石廊崎といふ、

伊豆の海上に、大島あり、其三原山ハ、火山にして、常に
煙と噴く、又三宅島、八丈島等あり、小笠原島ハ、其南の
方百八十里の洋中に位す、昔小笠原貞頼の見出し、
所なり、

相模、武藏、上總、下總、常陸ハ、地勢平にして、東山道の
上野、下野地方に連なり、一大平野を成す、これを關東
の平野と名づく、然れども武藏の西部に、秩父山あり、
常陸の西北部に、筑波一帯の嶺あり、上總の南境より、
安房にわたりてハ、又一むれの山あるを見るなり、
關東の平野にハ、利根川、多摩川、馬入川、那珂川等あり、
中にも利根川ハ、我國の大川にして、長さ七十餘里に

及ぶ、此川ハ、中流より、兩派に分れ、本流ハ、東に下り、常
陸の霞浦と名づく大湖の水を併せて、外洋に注ぎ、
分流ハ、南に下りて、内海に入る、これを江戸川といふ、
此川ハ、小汽船の通ふ所ハ、三十餘里の間に過ぎざれ
ども、小舟ハ尙遙に上流に浜ることを得べし、

第二、氣候及産物、

東海道ハ、北に山を負ひ、南に海を帯ぶるによりて、氣
候概ね温和なり、海に沿ひ、川に沿ひたる平野ハ、地味
肥いて、産物豊なり、
産物ハ、伊勢、尾張、武藏、上總、下總、常陸より、米を出す、中
に就きて、下總、常陸、武藏ハ、産額最も多し、又尾張、三河、

常陸より、綿と出し、武藏、甲斐、相模より、生絲と出し、武藏、尾張、伊勢より、藍と出し、相模、常陸より、煙草と出せ、伊勢、遠江、駿河、武藏、常陸、伊賀より、茶と出さず、伊勢、遠江、駿河の茶は、品質、山城茶に及ばざれども、其産額の多きこと、全國に冠たり、
工藝品の、甲斐、武藏より、盛に絹織物と出さず、下總の絹織物、又名あり、武藏の木綿織物、新様と出さずと、産額の多きとを以て著はれ、尾張、三河、伊勢、下總、常陸も、木綿織物に名を得たり、
尾張の瀬戸は、有名の陶器産地にして、東國にては、陶器と瀬戸物と稱するに至る、又尾張の七寶焼も、精巧

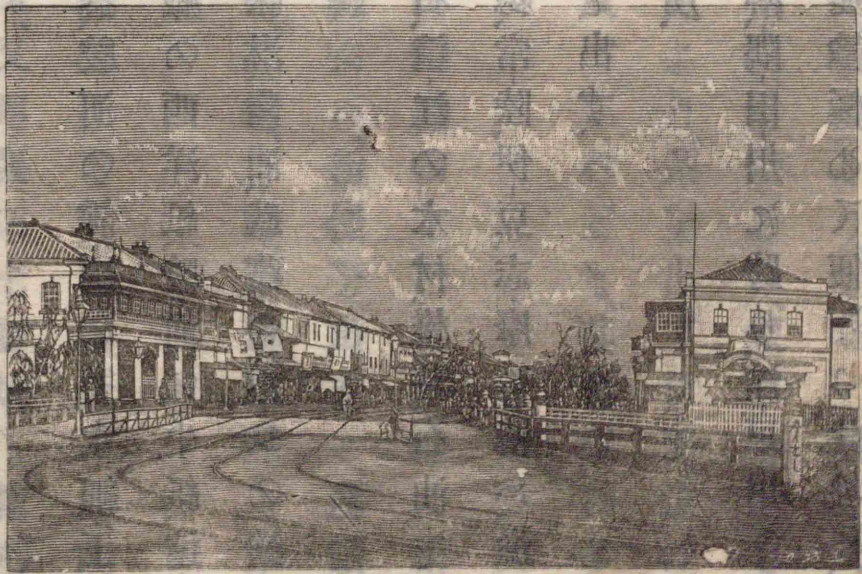
の工藝品なり、

伊勢の萬古焼と稱する陶器、駿河の静岡の寄木細工及塗物、尾張の名古屋扇、武藏の西洋紙、駿河の半紙、遠江の疊表、尾張の酒、下總の味淋、醤油、武藏の川口の鑄物、皆名ある産物なり、
相模、伊豆の石材、常陸の蠟石、遠江の木材、椎茸、石油も名ある産物にして、安房、上總、常陸、伊豆、志摩の海は、漁獵の利多く、三河、下總は、鹽と出さず、

第三、都會及名所、

東京は、武藏の内海にのぞみ、隅田川に跨り、江戸川と帯び、又鐵道の中心にして、運輸極めて便なり、此地は、

皇居及政府の在る所に、
 して、學校、醫院、商會等の
 壯麗なるもの多く、市街
 甚盛なり、
 東京ハ、我國第一の大都
 會にして、商業盛なれば、
 内外の産物あらざるも、
 のなく、且金、銀、銅、象牙、
 甲、革、塗物、指物の精巧な
 る工藝品、及團扇、錦畫等
 を出す、



東京の南八里ばかりに、横濱市あり、横濱ハ、外國人と
 貿易となす港なれば、外國人の此地に居留するもの
 多く、市街清潔にして、美麗なり、外國貿易の爲めに開
 きたる港ハ、此外五箇所あれども、此港の如く盛なる
 ものをし、

武藏の八王子ハ、織物の産地にして、繁盛の町なり、
 和も、また名ある町なり、
 相模の横須賀ハ、海軍鎮守府及盛大なる造船場の在
 る所なり、又鎌倉ハ、大都會の跡にして、江島ハ、風景に
 富み、人の多く遊ぶ所なり、
 相模の西部に、小田原町あり、其西なる箱根山中に、

七所の温泉あり、此邊ハ氣候涼しければ、夏ハ來りて暑と避くるもの多し、伊豆の南の端なる下田ハ、風帆船の多く碇泊する所にして、重要な港なり、又東海岸の熱海ハ、名高き温泉場なり、駿河の静岡市ハ、東海道屈指の都會にして、其海濱ハ、清水港あり、此州ハ、東海道の勝地にして、久能山、三條の松原等の名所あり、甲斐ハ、甲府といふ市あり、頗る繁盛なり、濱松ハ、遠江の平野の中央にあり、此州の名ある町なり、

三河ハ、矢作川の東岸に、岡崎町あり、此地ハ、徳川家康の興りし所なり、尾張の東境に、桶狭間の古戰場あり、此地ハ、織田信長の、今川義元を破りし所なり、尾張の名古屋市ハ、人口多く、其水陸運輸の便あることハ、東京と相類し、商業盛なり、名古屋の南につづける町と、熱田といふ、名高き熱田神宮の在る所なり、伊勢の海濱に、桑名、四日市あり、四日市ハ、名ある港にして、又鐵道の便あり、近隣諸州の貨物ハ、多くハ此地より輸出す、

伊勢の中部に、津といふ市あり、此州第一の繁盛の地

なり、伊勢の南部なる宇治山田ハ、大神宮の在る所に於て、
參詣者四方より集まる、これを伊勢參宮と唱ふ、
本摩訶ハ、鳥羽港あり、人口多からざれども、風帆船の
多く碇泊する所なるを以て名あり、
東京より東の諸州にハ、下總ハ、千葉町あり、銚子町ハ、
利根川の川口に當りて、運送の要地たり、又常陸の水
戸市ハ、元大藩の城下に於て、州の中央にあるを以て、
繁盛なり、

第四章、東山道

第一、位置

東山道の西部ハ、東海道と北陸道との内部にある地
方に於て、山多し、これを中仙道と稱し、中に近江、美濃、
飛騨、信濃、上野、下野の六州あり、東山道の東北部ハ、元
陸奥、出羽二州の地たり、因りてこれを奥羽地方と稱
す、三面海繞りて、内部にハ、高く峻しき山嶺あり、今此
地方を岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥と、羽前、羽後の七州に
分つ、

第二、中仙道の地勢

地圖上に於て、中仙道の川ハ、皆四面に流れ下るを見

る、然らば中仙道の地勢ハ、東海道、北陸道の地方より
も、高きことを知るべし、
中仙道に、三つの大山脈あり、中央山脈、西山脈、東山脈
是なり、

中央山脈ハ、信濃と飛驒との界より、北陸道の越後に
あたり、御岳、乘鞍岳、蓮花山等の高峯あり、中にも御岳
ハ、富士山にらぶべき高山にして、峯に積れる雪ハ、
夏も消えず、

西山脈ハ、飛驒、美濃の西にあり、美濃に秀でて大日岳、
白山となり、近江に抜でて伊吹山となる、此山脈の北
にわたるものハ、北陸道を横ぎり、南にわたるものハ、
大和の東南部及紀伊に蔓る、

東山脈ハ、信濃の東境にあたり、淺間山、岩塚山等の高
峯あり、上野にてハ、榛名の支嶺を出し、本脈ハ上野の
西北の隅にて、奥羽地方の二つの大山脈に連なる、
淺間山ハ、名高き火山にして、頂より煙を噴き、烈しく
發燒する時にハ、山鳴り動きて、燒石四方に飛ぶ、故に
其麓にハ、黒色の燒石、多く散亂するを見る、淺間山の
東を過ぐる山路ハ、碓氷峠にして、頗る峻し、
右の三つの大山脈ハ、信濃、飛驒の中央にわたれる支
嶺ありて、相連なり、信濃川、神通川、射水川と、天龍川、木
曾川、飛驒川との分水嶺となす、又木曾川と、天龍川と

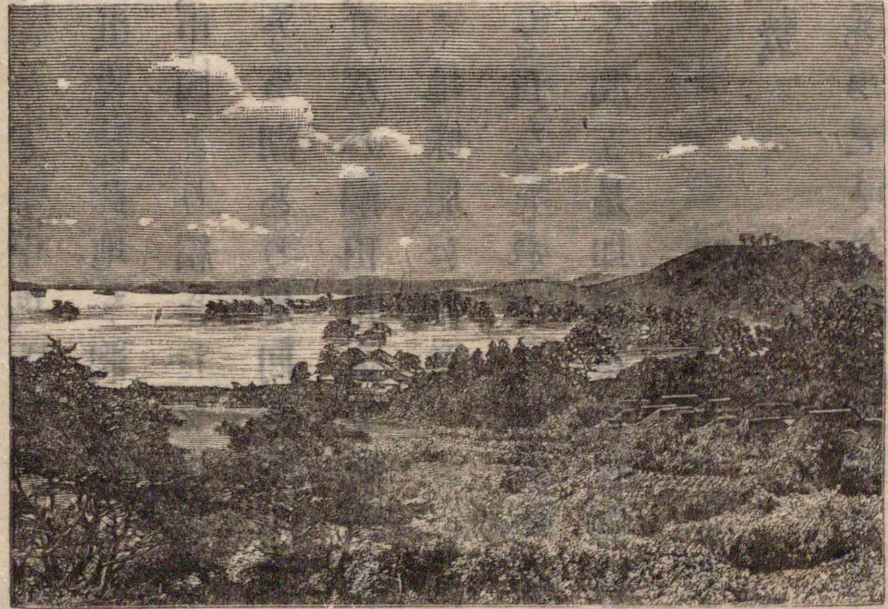
の間、一つの嶺あり、信濃に駒岳となり、美濃に
惠那岳となる、御岳と駒岳との間、木曾の山道にして、山聳に湖深
し、此山道の東に極まる所の、鳥井峠にして、前途に、鹽
尻峠、和田峠あり、是皆中央山脈と、東山脈とを連ぬる、
支嶺を越ゆる所なり、和田峠の麓に、諏訪の湖あり、是天龍川の源なり、此湖
の冬の間に、氷厚く結び、人馬其上を渡ると、危きこと
なし、故に信濃、飛騨の二州に、到る處山をらざるをなし、唯
信濃の北部なる、信濃川の谷に、細長き沃野あり、

美濃の東、北、西の三面に、山あれども、中央より南に
たりて、地勢開け、木曾川及其支流、此地を潤す、
近江の西山脈及其支嶺と、中國より續きたる嶺とあ
りて、四境を圍み、中間に大なる湖あり、周回七十三里
餘、是所謂琵琶の湖にして、其水の瀬田川となり、山城
に下る、湖の濱に、平野多く、地味肥にたり、
上野及下野の、各北境に山を負ひたれども、南に平野
廣く、利根川及其支流、此地を潤す、是即關東の平野の
一部なり、

第三 奥羽の地勢、

奥羽の海岸、甚しき出入あるをなし、唯陸奥に、斗

南の半島津輕の山嘴出
てて陸奥の内海をなす、此
斗南半島の東北の端と、
尻矢崎といふ、其東流川
又陸前に、牡鹿半島出で山
て、松島灣をなす、松島灣
の西浦に、一むれの小
島あり、多く松を生じて、大
風景よし、是日本三景のも
第一と稱する松島にして、
て、灣の名もこれより出山



てたり、牡鹿半島の東なる金華山、海上に抜き出で
たる孤峯にして、よく人に知らる、
奥羽地方に、奥羽山脈、羽越山脈といふ二つの大山
脈あり、
奥羽山脈は、上野、下野の北より、岩代の中央を横ぎり、
これより磐城、陸前、陸中と、兩羽との界を限りて、北に
延び、終に陸奥の中央を横ぎりて、海に迫る、此山脈中
に、上野の赤城山、下野の日光山、那須岳を始とし、岩
代の磐梯山、磐城の藏王岳、陸前の栗駒岳、陸中の岩鷲
山、陸奥の八甲田山等の高峯あり、又太平山、岩木山の
山嶺も、此山脈と相連なれり、

岩代の磐梯山ハ、數年前噴火して、夥しく土石と噴き
出し、ことあり、此山の南なる猪苗代の湖ハ、面積頗
る廣し、
羽越山脈ハ、北陸道の越後の東境より、羽前、羽後の中
央にわたる、岩代の駒岳、御神樂岳、飯豊山、羽前の朝日
山、月山、羽後の鳥海山ハ、此山脈中の高峯なり、
右の二つの大山脈ハ、羽前の檜原嶺、虚空藏山、羽後の
院内嶺の山頸にて相連なり、會津、米澤、最上の三大谷
と包む、谷間ハ、地味極めて肥けたり、山頸とハ、二つの
山脈と連ぬる山といふ、
又磐城と、三陸の海濱に、各一帯の嶺あり、其磐城にわ

たるものハ、常陸の筑波山に連なれる長き嶺なり、三
陸にわたる嶺の中ハ、早池峯といふ高峯あり、此嶺
よりわかれたる山山、海に迫りて、險崖多し、其他斗南
半島にも、一むれの山あり、
山嶺の形勢、わくの如くなるが故に、磐城ハ、地勢東西
の二部に分れ、海濱及阿武隈川の谷に、處處に平野あ
り、
岩代も、地勢東西の二部に分る、其西部ハ、會津の一大
谷にして、山山より流れ出る水ハ、皆平野の中央に集
まりて、會津川となり、羽越山脈と穿ちて、越後に下る、
岩代の東部の平野ハ、阿武隈川の谷にして、磐城の平

野と相交はる、陸前ハ海濱より北上川に沿ひて、廣き平野あり、陸中の北上川の谷も、平野廣し、而して此阿武隈川、北上川の谷ハ、即奥州の平野にして、長さ七八十里に及び、地味肥にたる所多し、陸奥ハ、東海の濱に、廣き平野あり、西部の岩木川の谷も、平野廣し、これを津輕の平野と稱す、羽前ハ、地勢分れて三部となる、即内地にハ、米澤、最上の二大谷あり、海濱にハ、庄内の平野ありて、羽後の飽海の平野に連なる、此三つの平野ハ、最上川と其支流の流れ通る所なり、羽後にハ、二つの廣き平野あり、御物川、能代川の平野

是をり、海濱に、八郎瀉と名づくる大なる湖あり、此湖ハ、男鹿島の半島と、大陸との間にありて、湖山の風景よし、奥羽の地ハ、右に述ぶるが如く、大川、廣野多く、處處に盛なる産業を營むべきの良地を存す、然れども其人口少なくして、土地未だ開けざる所あるハ、惜むべきなり、

第四、氣候及産物、

氣候ハ、中仙道の信濃、飛驒ハ、寒冷なれども、其兩際のみ濃、近江、上野、下野ハ、温和なり、奥羽の地ハ、中土の最北に位するによりて、寒氣強く、

冬の間ハ平地も雪積もると四五尺に及ぶ所あり、窓戸ハ雪に鎖され山路ハ旅人を通ぜざることあり、然れども此雪ハ却りて居民に大なる利益を與ふるものにて、雪舟と名づくる器械に、貨物を載せて、雪の上を牽けバ、能く一人にて、二馬にも劣らざる働をなすべく、これに臺を附くれバ、馬車、人車に代へ用ふべし、又雪の爲めに、田野の間の溝、小川ハ埋もれて、平地となり、運送、旅行に、大なる便利あるなり、産物ハ、近江より米、生絲、茶、縮緬、麻織物、陶器等を出し、人ハ商買に長けたり、美濃ハ米、生絲、茶、絹及木綿織物、陶器を出し、又世に知られたる美濃紙あり、

飛騨、信濃ハ、深山多きを以て、木材を出す、中にも木曾の山林にハ、良材多く、木曾川を流して、尾張に出す、又飛騨ハ銀を出し、信濃ハ、蠶桑の地にして、多量の生絲、蠶種を出し、兼れて米、煙草、紙、絹及木綿織物を出す、上野もまた蠶桑の地にして、生絲の産出多きこと、日本第一たり、又蠶種を出し、桐生等より、盛に絹織物を出す、下野ハ織物の業盛にして、絹及木綿織物を出し、又米、麻、煙草、木材、銅等の産あり、陸前、羽前、羽後ハ、米穀に富み、岩代、陸中より麻を出し、磐城より煙草を出す、岩代、磐城、羽前、陸前の生絲、岩代の蠶種、陸中、陸前、磐城の馬、陸中の牛、岩代、羽前の絹織

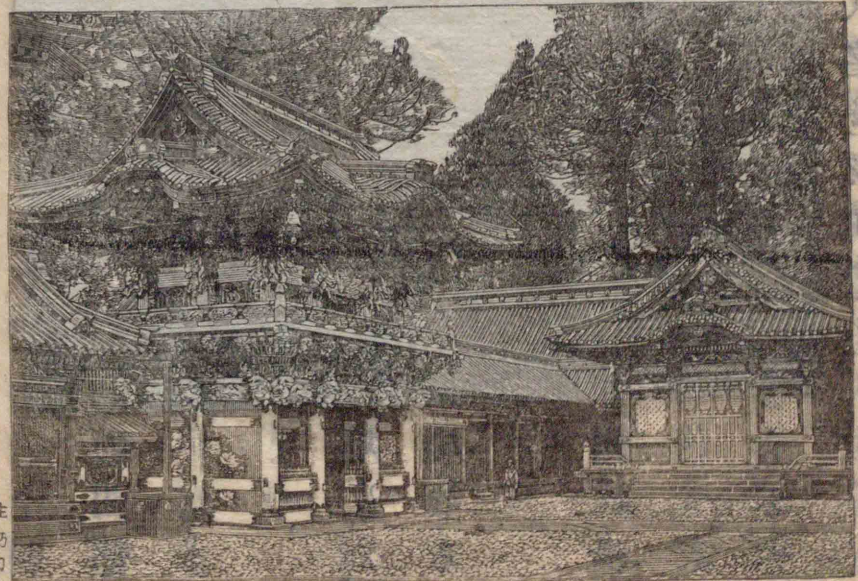
物、會津の陶器、會津及能代の塗物、皆名ある産物を
り、又陸中、羽後、岩代に、金、銀、銅多く陸奥、羽後より、木
材を出し、陸前、陸中、陸奥の海に、漁獵の利多く、陸前に、
兼れて鹽を出す、
本邦一、第五、都會及名所、
近江の琵琶湖の南に、大津町あり、京都に近く、湖上に、
汽船の通航多し、彦根に、湖の東岸の名ある町なり、
大津の近傍に、三井寺、唐崎、石山等の名所あり、中にも
唐崎の松の幹のめぐり五尋あり、數千の枝四邊に繁
り、珍しき巨松なり、

美濃の岐阜及大垣に、繁盛の地なりしが、明治二十四
年、大地震の爲めに破壊し、大に衰へたり、美濃の西部
に、關が原あり、名ある古戰場なり、
飛驒の高山に、此州の名ある町なり、
信濃の北部なる信濃川の谷に、長野町あり、此地に、
名高き善光寺あり、又近傍に、上杉、武田の古戰場なる
河中島あり、
信濃川の支流なる犀川に沿ひたる松本、千曲川に沿
ひたる上田も、名ある町なり、
上野に、高崎、前橋といふ町あり、其繁盛相をらぶべ
し、桐生も、織物の産地にして、名ある町なり、

高崎の西北なる榛名の山腹に、名高き伊香保温泉あり、又妙義山に、岩石奇秀なるを以て名ある所なり、

下野の宇都宮に、繁盛の町なり、其西の方九里に日光あり、徳川家康の廟所にして、其結構壯麗と極め、山中にも、中禪寺の湖、華嚴の瀧、裏見の瀧等

日光陽明門



主坊

ありて、山水の風景よし、栃木も、此州の名ある町なり、磐城の、阿武隈川の谷なる白河に、此州の名ある町なり、

岩代に、阿武隈川の谷に、福島郡山等の名ある町あり、福島近傍に、最も多く生絲と産する所なり、又會津に、若松町あり、此地より多く塗物、陶器と出ず、陸前に、仙臺市あり、此地に、奥羽第一の都會にして、其海濱に、鹽釜港あり、石巻港に、北上川の口にありて、繁盛の地なれども、川口淺きを以て、大なる汽船に、其東南の方なる萩濱に寄泊す、

陸中の盛岡市に、北上川に沿ひ、此州の要地と占めて、

頗る繁盛なり、陸奥に、内海の南岸に、青森あり、東北鐵道の極端にして、緊要の地たり、又西部の津輕の平野に、弘前市あり、羽前の米澤に、同名の市あり、盛に絹織物と出す、最上に、山形市あり、州の中央にありて、最も繁盛なり、庄内の鶴岡も、また名ある町なり、羽後の酒田に、最上川の川口にある港なり、御物川の谷を、秋田市に、羽後第一の繁盛の地にして、其西の海濱に、土崎港あり、又能代川の川口に、能代港あり、塗物と産すると以て名あり、

第五章、北陸道、

第一、位置及地勢、

北陸道は、東山道の北にあり、西南より、東北に向ひて、若狭、越前、加賀、能登、越中、越後の六州連なり、越後の近海に、佐渡の一州あり、此地方は、通じて北國とも稱するなり、海岸は、西部に、出入多く、小濱、敦賀等の灣あり、中部に、能登の半島、遠く日本海に出てて、越中の大灣を、いづく、半島の極端と、珠洲岬といふ、東部の越後の海岸は、六十餘里の間、殆ど一直線にして、著しき岬灣を、北陸道は、東山道より續きたる二大嶺、中間を横ぎり

て、地勢三部に分る、即若狹、越前、加賀、能登の四州ハ、西
山脈の西にあり、越中、上越後の地ハ、西山脈と中央山
脈との間にあり、中越後、下越後の地ハ、中央山脈の東
にあるなり、
今これを委しくいへば、若狹ハ到る處山多けれども、
一も高きものをなし、

越前ハ、西山脈東南の境にあたり、西北の方漸く低く
して、舟橋川及其支流、此間を流れ、沃野廣し、然るに西
南部にハ、又西山脈よりあはれ出てたる、木芽嶺あり
て、海岸に迫り、敦賀の地方を隔つ、

加賀ハ、西山脈東境に連なり、白山其間に聳け、支嶺ハ
越前の界を限り、手取川中間を流る、海濱ハ地勢平
にして、潟と稱する沼多く、地味ハ概ね肥なり、白山
ハ、北陸第一の高山にして、峯に積れる雪ハ、消ゆる時
をなし、

能登ハ、西山脈の餘勢を受け、丘陵浪の如くなれども、
一も高山をく、又大川をなし、
越中ハ、西山脈と中央山脈との間にあるにより、其支
嶺左右より迫り、神通、射水等のはやき流、此間にあり、
然れども海濱ハ、沃野廣く、米を産すること、日本第一
たり、立山ハ、中央山脈の中に聳け、此州の最も高き峯
たり、

上越後の、中央山脈の過ぐる所にして、山多く、焼山、妙香山等の高峯あり、上越後の西境の親不知、東境の米山、皆中央山脈の海に迫る所なり、中央山脈の東なる中越後、下越後の地、信濃川、阿賀野川等の流るゝ所にして、沃野遠く連なり、長さ三十餘里に及ぶ、これを越後の平野と稱す、信濃川、中土第一の大川にして、其支流甚多し、阿賀野川、岩代の會津川の下流なり、然れども中越後、下越後の東南の境に、東山脈及羽越山脈ありて、山殊に深し、佐渡、北と南部とに、山多く、其中間、平野多し、金北山、島中の高峯なり、

第二、氣候及産物、

北陸道、南に山を負ふによりて、氣候寒冷なり、又加賀、能登の地方、雨降ること多き所なり、北陸道、冬、雪多く降り、越後の西部の如き、雪積もること深く、家に出入する、恰も地窖の中に入りまするが如く、市街の間、雪に埋もれたる簷の下より、あづかに行人を通ずるに至る、又雪國に、山上の樹木より落つる所の雪片、漸く轉り落つるに従ひ、驚くべき大塊となりて、行人を壓殺し、或は春暖に向ふ頃、積雪として、山腹に積もれる雪の、俄に崩れ落つる等の危険あるなり、

産物の、鑛物に、佐渡の金、銀、越後の石油、銅、加賀の銅等あり、沿海の地の、漁獵の利多く、能登の兼れて鹽と出す、

農産物の、越中、越後に米穀多く、越後、加賀、越前に麻多く、越後より生絲と出し、加賀、越後より茶と出す、
工藝品の、越後、加賀、越前の絹織物、越中、加賀の木綿織物、能登、越中、越後の麻織物、加賀の九谷焼、吳産、能登の輪島塗、越前の奉書紙、鳥の子紙、越中の銅鐵器、金澤の象眼細工最も名あり、

越後に、火井とて、地中より、石炭瓦斯を發するものあり、此瓦斯の、燃して燈火となし、又ハ物を煮ることとを得べし、

第三、都會及名所、

越前の西部の海濱に、敦賀あり、北海の重要なる港にして、船舶多く集まり、鐵道これより南部の諸州に連なる、

越前の東部の平野に、福井市あり、越前第一の繁盛の地なり、福井の東に近き、舟橋川の傍に、新田義貞が戦死せし古跡あり、今其地に藤島神社を建つ、川口の三國ハ、名ある港なり、

加賀の金澤市ハ、人口多く、名古屋に次ぐ大都會なり、此地より多く九谷焼、銅器、漆器と出す、小松もまた名

ある町なり、能登に、西の海濱に、漆器の産所なる輪島あり、東の海濱に、七尾あり、七尾に、北海の良港なり、加賀より、越中に越ゆる所に、俱利伽羅峠あり、昔木曾義仲が、平氏の軍を破りし古戰場なり、然れども今の北國街道は、こゝを經過せず、越中に、高岡市あり、此地多く銅鐵器を産す、又神通川に沿ひて、富山市あり、これより海濱に出れば、魚津町あり、又伏木に、此州の良港なり、上越後に、直江津あり、重要なる港にして、信濃にて用ふる魚鹽は、此地より送り輸すもの多し、其南に近き

高田も、名ある町なり、

信濃川の川口に、新潟港あり、頗る繁盛なり、此港は、外國貿易場の一なり、信濃川に、小汽船を浮べ、此港と内地の三條、長岡等の間に通航す、新潟の東北なる新發田も、名ある町なり、

佐渡の相川に、金山に近くして、繁盛なり、又東南岸に、夷湊あり、船の多く寄泊する所にして、新潟まで海路凡そ十四里なり、

地名一覽及其讀例

總論

○島 中土 四國 九州 蝦夷 千島 琉球 ○海 太平洋 日本海
 支那海 ○地理區 畿内 東海道 東山道 北陸道 山陰道
 山陽道 南海道 西海道 北海道
 畿内
 ○州 山城 大和 河内 和泉 攝津 ○海 茅渚の海 ○山
 大臺原山 大峯 比叡山 愛宕山 ○川 淀川 宇治川 賀茂川
 大和川 吉野川 ○平野 畿内の平野 ○都會 京都 大阪 奈
 良 堺 神戸 兵庫 ○名所 東山 嵐山 高雄 東大寺 春日
 の社 畝傍山陵 吉野山 金剛山 湊川 有馬 須磨の浦 一谷

東海道

○州 伊賀 伊勢 志摩 尾張 三河 遠江 駿河 甲斐 伊豆
 相模 武藏 安房 ○上總 下總 常陸 ○島 大島 三宅島 八丈島
 小笠原島 ○半島、山嘴、岬 伊豆半島 房總半島 三浦山嘴
 野島崎 石廊崎 ○海、湖 伊勢の内海 三河灣 遠州灘 駿河灣
 相模灘 武藏の内海 霞浦 ○山 富士山 八岳 白根山
 大山 箱根山 天城山 三原山 秩父山 筑波山 ○川 木曾川
 矢作川 天龍川 大井川 富士川 馬入川 多摩川 利根川 江戸川
 隅田川 那珂川 ○平野 關東の平野 關西の平野 ○都
 會 東京 横濱 八王子 浦和 横須賀 小田原 下田 静岡
 清水港 甲府 濱松 岡崎 名古屋 桑名 四日市 津 鳥羽

千葉 銚子 水戸 ○名所 鎌倉 江島 熱海 久能山 三保の松原 桶狭間 熱田 宇治 山田

東山道

○地理區 中仙道 陸奥 出羽 奥羽 ○州 近江 美濃 飛騨 信濃 上野 下野 岩代 磐城 陸前 陸中 陸奥 羽前 羽後
 ○半島、山嘴、岬 牡鹿の半島 斗南の半島 尻矢崎 津輕の山嘴
 男鹿島の半島 ○海、湖 琵琶の湖 諏訪の湖 猪苗代の湖 松島灣
 陸奥の内海 八郎潟 ○山 中央山脈 西山脈 東山脈 御岳
 乗鞍岳 蓮花山 大日岳 白山 伊吹山 淺間山 岩手山 駒岳
 惠那岳 妙義山 榛名山 奥羽山脈 羽越山脈 赤城山 日光山
 那須岳 磐梯山 藏王岳 栗駒岳 岩鷲山 八甲田山 大平山

岩木山 御神樂岳 飯豊山 朝日山 月山 鳥海山 檜原嶺 虛
 空藏山 院内嶺 早池峯 金華山 ○峠 鳥井峠 鹽尻峠 和田
 峠 碓氷峠 ○川 瀬田川 信濃川 犀川 千曲川 神通川 射
 水川 飛騨川 會津川 阿武隈川 北上川 岩木川 最上川 ○
 平野、谷 會津の谷 奥州の平野 津輕の平野 米澤の谷 最上の
 谷 庄内の平野 飽海の平野 御物川の平野 能代川の平野 ○
 都會 太津 彦根 岐阜 大垣 高山 長野 松本 上田 高崎
 前橋 桐生 宇都宮 栃木 白河 福島 郡山 若松 仙臺 鹽
 釜 石巻 荻濱 盛岡 青森 弘前 米澤 山形 鶴岡 酒田
 秋田 土崎 能代 ○名所 三井寺 唐崎 石山 關が原 善光
 寺 河中島 伊香保 日光 中禪寺の湖 華嚴の瀧 裏見の瀧

北陸道

○地理區 北國 ○州 若狹 越前 加賀 能登 越中 越後
 佐渡 ○半島、岬 能登の半島 珠洲岬 ○海 小濱灣 敦賀灣
 越中灣 ○山 木芽嶺 白山 立山 燒山 妙香山 米山 金北
 山 ○川 舟橋川 手取川 阿賀野川 ○都會 敦賀 福井 三
 國 金澤 小松 輪島 七尾 高岡 富山 魚津 伏木 直江津
 高田 新潟 三條 長岡 新發田 相川 夷湊 ○名所 藤島神
 社 親不知 俱利伽羅峠

版 權 所 有

明治二十五年九月一日印刷
明治二十五年九月六日出
明治二十六年八月廿二日訂正再版印刷
明治二十六年八月廿五日發行
明治二十六年八月廿九日文部省檢定濟

定價金十四錢

著 者

東京市牛込區二十騎町二十四番地

山 田 行 元



發 行 者

東京市神田區裏神保町六番地

上 原 才 一 郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地

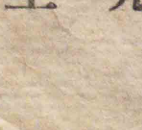
根 岸 高 光



印 刷 者

東京市日本橋區橋町二丁目一番地

大 草 松 榮 堂



賣 捌 者

大坂市東區備後町四丁目

吉 岡 平 助

